

森口眞衣（日本医療大学／紹介校：北海道大学）

「医学」とは病気について研究し、その治療法や予防法などを開発する学問である。ある病気を治療するためには、まずその状態を「病気である」と判断する診断の基準が確立していなければならない。医学における実践は、「病気とは何か？」を定義し、身体あるいは精神のどこかが病的状態にあると確定することを目的とした病理（診断）学、またそこで診断された病気を実際に治療する方法を確定していく治療学とによって支えられている。「医学」より広範な意味を持つ語として「医療」もあるが、これは人間の健康を維持・回復・促進することを目的とした諸活動の全体を含む。E

現代における医学は「基礎医学」と「臨床医学」の2つに大きく分類されている。前者は人体の構造・機能および疾患の原因に関する知見、すなわち理論を多く扱う領域で、後者はそれらを幅広い対象者への直接の診断や治療に適用していく実践の領域といえるだろう。医療従事者を養成するためにはこれらの領域を段階的に学ぶことが必要とされているが、基本的な知識や技術を身につけたのちに実際の臨床場面で実践の応用を繰り返し、医師としての経験を積んでいくことになる。

医学書とはこうした医療における理論・実践に関する内容が網羅されたもので、医療従事者養成時には教科書として、また臨床場面では手引書として使用されている。もちろんインド医学における医学書も同様の位置づけが想定され、代表的なインド医学文献として知られる『チャラカサンヒター』『スシュルタサンヒター』は総論・病因論・人体構造論・治療論などの巻で構成されていることから、医学書の定義を十分に満たしているといえよう。

ただし従来のインド医学書研究においてまず注目されてきたのは実践面よりも、むしろその理論面であったといえるのではないだろうか。たとえば『チャラカサンヒター』ではインド医学の病理論の基盤とされるトリ・ドーシャ説、人体構造論の中で説かれるアートマン論などに対し、サーンキヤやヴァイシェシカなどの哲学諸派や『ヤージュニャヴァルキヤスムリティ』といったダルマ文献との関係が既に指摘され、成果の蓄積がある。しかし実践面に関していうと、たとえば治療法の記載に見られる薬草・薬剤を明確に特定して治療法を具体的に解明することは困難も多い。そのため新たな研究視点の探索が課題となっている。

さて仏教経典では『律蔵』を中心に僧医たちの活躍場面が数多く記載されていることが知られている。内容的にもインド医学との共通性が見られ、仏教教団が何らかの形でインド医学を取り入れ、いわゆる「仏教医学」として実践していた可能性が想定されてきた。本発表ではこの点に注目し、インド医学書における実践面の解明に寄与しうる新たな研究視点について、医学書の中でも実践的な記載が多いとされる『スシュルタサンヒター』の分析を通して考察する。

<キーワード> インド医学、『スシュルタサンヒター』、医学書研究